

第906回オーチャード定期演奏会

終演予定17:40

5.6(日) 15:00開演 **Bunkamura** オーチャードホール

第907回サントリー定期シリーズ

終演予定21:40

5.8(火) 19:00開演 サントリーホール

第117回東京オペラシティ定期シリーズ

終演予定21:40

5.10(木) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

指揮: チョン・ミョンファン

フロレスタン(テノール): ベーター・ザイフェルト

囚人1(テノール): 馬場 崇*

レオノーレ(ソプラノ): マヌエラ・ウール

囚人2(バス): 高田智士*

ドン・フェルナンド(バリトン): 小森輝彦

合唱: 東京オペラシンガーズ**(合唱指揮: 田中祐子)

ドン・ピツァロ(バス): ルカ・ピサローニ

お話: 篠井英介 / お話素案: 小宮正安

ロッコ(バス): フランツ・ヨーゼフ・ゼーリヒ

コンサートマスター: 近藤 薫

マルツェリーネ(ソプラノ): シルヴィア・シュヴァルツ

字幕: 小宮正安

ヤキーノ(テノール): 大槻孝志

字幕操作: 藤原彩加(Zimaku プラス)

5/6

5/8

5/10

May 6

May 8

May 10

東京フィルだより

ベートーヴェン: 歌劇『フィデリオ』(演奏会形式: 全2幕・ドイツ語上演・字幕付)(約130分)

第1幕 (約72分)

- ・「さあ これで2人きり」
- ・「ああ 彼と一緒にあって」
- ・「ああ とってもうれしいわ」
- ・「よし 勇気を忘れるな」
- ・行進曲
- ・「よし 今こそチャンスだ」
- ・「人でなし! どこへ行く気?」
- ・「ああ 何でうれしい」
- ・「どうなりました?」~「ひびく 急いで!」~「貴様 この野郎!」

一 休憩 (約15分)

第2幕 (約57分)

- ・「おお なんという闇だ ここは!」
- ・「何で冷たい この地下の世界は!」
- ・「さあ掘るぞ どんどん掘るぞ」
- ・「お2人の親切が報われますように」
- ・「野郎 死ぬ!」
- ・「ああ 何でうれしい!」
- ・最終場への場面転換
- ・「嬉しい! やった!」~「お助けください」~「ああ 神様…」
- ・「素晴らしい伴侶を得た者は」

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

共催: 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団(5/10)

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)/

公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団(5/8)

協力: **Bunkamura** (5/6)



文化庁
Agency for Cultural Affairs,
Government of Japan

マエストロ・チョン・ミョンフンからのメッセージ ベートーヴェン『フィデリオ』によせて

「オペラの中には、音楽を主体とした演奏会形式で上演する方が良い作品がいくつかあります。ベートーヴェンの『フィデリオ』は、色々な意味でその最高の例のひとつです。この作品の演奏は、大きなチャレンジであり、意義深いチャレンジでもあります。また、人間としての強いメッセージがそこにあるという意味では、「第九」交響曲にも似ています。



©ビューアーチェ

『フィデリオ』の深遠な音楽の魂はすべて、『レオノーレ』序曲第3番に集約されています。ですから今回は、『フィデリオ』序曲ではなく、その前にベートーヴェンが作曲していた『レオノーレ』序曲の第3番に立ち返ろうと思っています。最終的に採用された『フィデリオ』序曲は、第1幕前半の軽い部分に合っています。しかし特にコンサートの場合は、最高の音楽を演奏したい。それに通常の上演では第2幕のフィナーレの前にしばしば『レオノーレ』序曲が挿入されますが、私にはその意味がわかりません。まず全体の核心が込められた『レオノーレ』序曲があって、軽い曲が続いた後、本当のドラマに入っていく。そして第2幕のプロレスタンのアリアが始まると、『レオノーレ』序曲に込められていたものがわかる……といった流れが正しいと考えています。

『フィデリオ』は音楽的な充足感をもたらす作品であり、全体のフィナーレはもちろん、第1幕の短くも美しい二重唱、レオノーレのアリア、囚人たちの合唱、オーケストラの導入を含めて本作の中で最もドラマティックな第2幕のプロレスタンのアリアなど、聴きどころが多々あります。

しかし、ベートーヴェンを語るのには、人間としての真実は何かを語ることであり、話すのは容易ではありません。ただ東京フィルと私は、長い間に何回もベートーヴェンの作品を取り上げてきました。聴衆の皆様が、それを反映した今回の演奏から何らかのスピリットを聞き取ってくださると嬉しく思います」。

(ききて: 柴田克彦)

『フィデリオ』の物語

ある日、スペインのとある町の刑務所に、働き者の青年がやってきます。その名もフィデリオ。真面目に働く彼を人々は気に入り、婿にしようとする者まで現れます。ところが、フィデリオには大きな秘密がありました。実の姿は囚われの夫を救出するため男装し、刑務所に潜入して救出のチャンスを狙う女性、レオノーレだったのです。

愛する夫を救うため、
自らの身の危険もかえりみず
悪と戦った勇敢な妻、レオノーレ。

互いを信じ、思いやる夫婦の愛が理不尽な悪を倒し、
人々に自由をもたらしました。
物語の結末で歌われる歓喜の合唱は、
ベートーヴェンからすべての人々に贈られた愛と勇気のメッセージなのです。



歌劇『フィデリオ』第2幕。囚われの夫フロレスタン(右)を護るべく、刑務所長ピツァロ(左)の前に立ちはだかるレオノーレ(中央)。テアトル・リリックにおける上演風景。1860年。

楽曲紹介

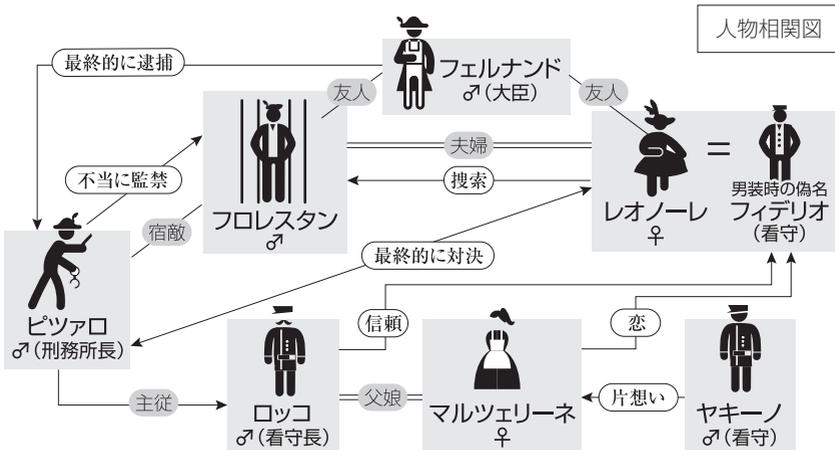
解説=小宮 正安



ベートーヴェン(1770-1827)

歌劇『フィデリオ』 (演奏会形式:全2幕・ドイツ語上演・字幕付)

まずは人物相関図を示しておこう。鍵となるのは、「レオノーレ」という女性が、「フィデリオ」という偽名を用いて、男性のふりをしている点。理由は、彼女の夫であるフロレスタンが失踪してしまったためである。夫が政敵によってどこかの牢獄に閉じ込められているのでは、と予想したレオノーレは、彼を探して様々な牢獄に潜入するべく、男性に扮装して「フィデリオ」と名乗り、見習い看守として雇ってもらった作戦に出る…。



原作の舞台は18世紀セビアの国事犯刑務所。フェルナンド、フロレスタン、ピツァロは貴族であり、元々はドン・フェルナンド、ドン・フロレスタン、ドン・ピツァロというが、ここでは煩雑さを避けるため上のような表記とした。

ベートーヴェン初の歌劇と『レオノーレ』序曲第3番

1805年、ベートーヴェンはこの勇敢なヒロインを主人公として、彼にとって初となる歌劇を発表する。ただし初演が失敗したため、翌年の再演に向けて大幅な改訂が施され、その作業は序曲にまで及んだ。こうして誕生したのが、『レオノーレ』序曲第3番(詳しい経緯については、17ページからの読み物をご覧ください)。1) 牢獄の奥底で、フロrestanが幸せな過去を振り返って歌うアリアの旋律が明滅する序奏部、2) レオノーレの活躍を彷彿させるソナタ形式の主部(その終わり近くには、政敵にあわや殺されそうになる夫妻の危機を救う、大臣到着の合図=舞台裏からのトランペットのファンファーレが響き渡る)、3) 自由と解放の喜びが爆発する終結部という構成となっている。

なお序曲に繰り返し現れる、「タタータ」という鎖を断ち切るような躍動感に溢れるリズムは、自由の象徴として重要だ。また序曲はハ長調を基本としているが、この調性は勝利を意味し、歌劇の大団円にも現れるので、どうぞお楽しみに。

歌劇『フィデリオ』の物語と音楽

〔第1幕〕 いよいよ歌劇の本編だが、ここから先は、ベートーヴェンが歌劇『レオノーレ』を大改訂し、1814年に『フィデリオ』として発表したバージョンに基づいて解説を進めてゆこう。(本日の演奏では、ベートーヴェン自身が書いた原典の形に近づくことを目指して、ヘルガ・リューニングとローベルト・ディディオンが編集した、ベーレンライター社出版の楽譜が用いられる。ただし楽譜に記載されている台詞については、適宜カットや短縮がおこなわれる予定である。)

第1幕は、牢獄の中庭。看守長のロッコは、フィデリオ…つまり男装したレオノーレ…を女性とは知らず、有能な看守として信頼し、娘のマルツェリーネは、彼に惚れ込んでさえている。それを知っているもう1人の看守ヤキーノは、恋敵が現れたと気が気ではない〔『さあ これで2人きり』『ああ 彼と一緒に』〕。

と、ここまでは軽快な曲が続くが、レオノーレが登場するとがぜん雰囲気が変わる。理由としては、レオノーレの背負っている運命もさりながら、彼女の夫フロrestanが貴族である=レオノーレ自身も貴族の妻であることが重要だ。つまり、ロッコ、マルツェリーネ、ヤキーノは庶

民の代表であって、歌と台詞を交えた「歌芝居」のスタイルで彼らの生活が描かれている。対してレオノーレやフロレスタン(さらにピツァロやフェルナンド)は貴族であるため、気高さや荘重さを音楽によって表現する…という歌劇の伝統的な手法が、織り交ぜられている。

5/6

5/8

5/10

さて、フロレスタンの安否を気遣うレオノーレ、彼女…といおうか彼との結婚を夢見るマルツェリーネ、彼を娘の結婚相手にと目論むロッコ、恋敵を前にふてくされるヤキーノと、各人の思いが入り乱れる四重唱[『ああ とってもうれしいわ』]となるが、歌詞の内容とは裏腹に、互いに仲の良さそうな輪唱の形式で書かれているのが、ベートーヴェン一流の皮肉だ。続くロッコの人生訓[『金がなけりゃ』]では、愛よりも金が大事だとする内容と呼応してポルカを彷彿させる軽快な曲想が再び現れる。だが、牢獄の奥底に閉じ込められている囚人の存在を知ったレオノーレが、ロッコに同行を求める下り[『よし 勇気を忘れるな』]になると、2人の安全を気遣うマルツェリーネも加わって、緊張が張り詰める。

そこへ刑務所長のピツァロが現れる。軽快な登場の行進曲とは裏腹に、牢獄の奥底に閉じ込めた政敵フロレスタンの始末を決意する場面[『よし 今こそチャンスだ』]では、黒い野望渦巻く音楽が炸裂する。さらにピツァロは、自らの手を汚さずに計画を実行すべく、看守長のロッコを巻き込むが[『おい いいか急ぎの用だ』]、硬軟使い分けて彼に迫る手口を音楽が克明に追う。結果ロッコは、牢獄の奥底の囚人を埋めるための穴を掘ることに同意させられる羽目に。

この様子を陰から見ていたレオノーレは、夫失踪の真犯人がピツァロであることを知り、ピツァロへの憤り→どのようなことがあろうと、夫への愛を貫けるようにという祈り→夫救出への決意を新たにすると長大なナンバーを歌い上げる[『人だなし! どこへ行く気?』]。これは、「レチタティーヴォ(台詞に当たる部分を音楽に乗せて歌う部分)→アリアの主部(ゆったりとしたテンポで歌い上げる部分)→ストレッタ(急速なテンポでアリアを締め括る部分)」という、ヒーローやヒロイン役が独壇場を演じる際の歌劇の定型を踏まえたもの。ただしこれは、歌手の単なる“のど自慢”のためではなく、登場人物の中に去来する感情を音楽で表現するために、ベートーヴェンがあえて慣習的な手法を用いた結果といえよう。

レオノーレは、囚人たちに空気を吸わせるようロッコへ提案する。彼らが屋外

に出てくれば、その中に夫の姿を見つけられるかもしれないという思惑ゆえのことで、最初はしぶっていたロッコも彼女の熱心な頼みに首を縦に振る。ここから始まるのが、いわゆる「囚人の合唱」[『ああ 何てうれしい』]。牢獄から囚人たちが連れ出され→太陽に目が眩み→外の風に久しぶりに触れ→感動の声徐徐に湧き上がる、という一連の流れを音楽が雄弁に描き出す。

この「囚人の合唱」だが、筋書きの展開上は必ずしも必要ではない。ただしこの合唱が入ることで、危機に陥った人物が助け出されるという救出劇(これは1789年の革命以降、動乱と混迷の時代を迎えたフランスを中心に人気のあった演劇のスタイルで、『フィデリオ』の原作もそれに当たる)が、単に個人や家族の問題を超え、人類にとっての理想=自由を求めるドラマへと昇華されてゆく。合唱という形式を用いて、名もない人々が声を合わせて新たな世界への希望を歌い上げるといった手法は、『フィデリオ』第2幕の最終部、さらには『交響曲第9番』の最終楽章を特徴づける、ベートーヴェンのこだわりである。

ただし自由の喜びを謳歌する合唱も、見張られていることを案じる囚人仲間の警告によって、影が立ち込める。さらに、囚人たちを勝手に外に出したことに気付いたピツァロの怒りが爆発したため、彼らは再び牢に戻らなければならない。結局は夫の姿を見つけられなかったレオノーレが、ピツァロへの怒りを新たにすると、ピツァロに叱責されたロッコやマルツェリーネ、ヤキーノの戸惑いなど、舞台上の人物の思いが交差する重唱で第1幕が終わる[『どうになりました?』]。

〔第2幕〕 第2幕は、牢獄の奥底。絶望を象徴するへ短調の和音が鳴り響く中、重苦しい序奏に続いて、囚われの身であるフロロスタンの長大なナンバーが始まる[『おお なんとこの闇だ ここは!』]。なお彼の第一声は、日本語字幕では「おお」としたが、原語のドイツ語では“Gott!”つまり「神よ!」という意味になる。つまりはフロロスタンと神との対話であり、第1幕のレオノーレの独断場で彼女が神に祈りを捧げる場面と対を成している。またこれも、第1幕のレオノーレのそれのように「レチタティーヴォ→アリア主部→ストレッタ」という形式を踏まえている

が、レチタティーヴォでは絶望が、アリア主部では過ぎ去りし幸せへの回顧が(このメロディこそ『レオノーレ序曲第3番』の序奏部で告知されていたものだ)、ストレッタではレオノーレの幻影を前にした束の間の喜びが歌われた後、全ては再び牢獄の暗い闇に閉ざされ、フロレスタン自身も深い眠りに落ちてゆく。

レオノーレとロッコが、牢獄の奥底に降りてくる。ここでベートーヴェンは極限の緊張感を出すべく、あえて歌ではなく、オーケストラの演奏に乗せて台詞を歌手に喋らせる「メロドラマ」という手法を用いた[『何て冷たい この地下の世界は!』]。牢獄の奥底の寒さ、囚人を見つけた瞬間の心の震えといった心理描写に加え、フロレスタンのナンバーに登場したレオノーレに寄せる彼の想いを象徴する動機などを交え、オーケストラが雄弁にドラマを語る。それに続き、2人は囚人を埋める穴を掘る作業に取り掛かるが、三連符の執拗なリズムに乗り、コントラファゴットの不気味な響きを交えたメロディが、重苦しい作業に携わる彼らの追い詰められた心境を増幅する[『さあ掘るぞ どんどん掘るぞ』]。

フロレスタンが眠りから覚め、レオノーレはこの囚人こそが夫であると分かるが、ロッコの手前それを口にはできない…もちろんフロレスタンは眼前にいる看守見習いが、自分の妻であることを知る由もない…。フロレスタンにワインとパンを差し出すレオノーレ、感謝しながらそれを押しいただくフロレスタン、レオノーレの行動に戸惑いつつも感動を隠し切れないロッコと、三者三様の想いが綴られる(『お2人の親切が報われますように』)。そこへピツァロが登場、フロレスタンを始末しようとするも、レオノーレが彼の前に立ちはだかり、自分がフロレスタンの妻だと明かす[『野郎 死ぬ!』]。動揺したピツァロは2人とも殺そうとするが、そこへ視察にやってきた大臣フェルナンドの到着を告げるファンファーレが遠くから鳴り響き、ピツァロはその場を去る。ようやく再会し、互いが互いを認め合ったフロレスタンとレオノーレの喜びの二重唱[『ああ 何てうれしい!』]。

場面は変わって、宮殿前の広場。不当な禁固から解放された囚人たちと、彼らを迎えに来た家族等が歓喜の歌声を上げる中[『うれしい! やった!』]、大臣フェルナンドが登場する。彼は人々に兄弟愛を説き、盟友フロレスタンの妻であるレオノーレが男装して夫を助けた顛末を知ってピツァロを追放し…いっぽうレオノーレを男性だと信じてきたマルツェリーネは失望を隠せない…、フロレスタンの鎖を解く役割をレオノーレに与える。

レオノーレがフロレスタンの鎖を解く場面では、若き日のベートーヴェンが、尊敬する啓蒙君主ヨーゼフ2世(1741-1790)の死を悼んで書いた声楽曲『皇帝ヨーゼフ2世の葬送カンタータ』の一部の旋律が用いられている。『フィデリオ』ではまずその旋律がオーボエに与えられた後、徐々に登場人物たちに受け渡され、その場にいる人全員…そこには恋に破れたマルツェリーネも含まれる…の間に湧き上がる感動の念を静かに高めてゆく。ここに、身分上の貴族というのみならず、精神の貴族でもあるレオノーレ、フロレスタン、そしてフェルナンドは、ヨーゼフ2世のごとく彼らのよき指導者として、希望の光射す未来を築き上げてゆく存在となったのである。

そして最後は、歓喜が爆発するフィナーレ(『素晴らしい伴侶を得た者は一緒に歓びの声をあげよう!』)。レオノーレの勇敢な行動はもちろんのこと、彼女の揺るがぬ愛情が、力強い合唱を主体に高らかに讃美される。オーケストラによって繰り返されるのは、勝利を表すハ長調に乗って、『レオノーレ』序曲第3番にも出てきた「タタータ」という自由を象徴するリズム。ここに、とある夫婦の愛と救出の物語は、自由という普遍的なテーマの物語へと昇華したのだった。

【原作】 ジャン・ニコラス・ブイ『レオノーレ、または夫婦愛』

【台本】 ヨーゼフ・フォン・ライトナー、フリードリヒ・ライチュケ

【作曲年代】 『レオノーレ』(第1稿) 1804~1805年 / 『レオノーレ』(第2稿) 1806年 / 『フィデリオ』 1814年

【初演】 『レオノーレ』(第1稿) 1805年11月20日アン・デア・ウィーン劇場にて / 『レオノーレ』(第2稿) 1806年3月29日アン・デア・ウィーン劇場にて / 『フィデリオ』 1814年5月23日ケルントナートーア劇場にて

【楽器編成】 ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2 (『レオノーレ』序曲第3番ではトロンボーン3)、ティンパニ、弦楽5部 / バンダ(舞台裏):トランペット

こみや まさやす / ヨーロッパ文化史研究者。横浜国立大学教授。著書に『コンスタンツェ・モーツァルト<悪妻>伝説の虚実』(講談社選書メチエ)、『名曲誕生 時代が生んだクラシック音楽』(山川出版社)等多数。日生劇場『フィデリオ』ドラマトゥルグ、『東京・春・音楽祭』でのナビゲーター、テレビやラジオへの出演など幅広い分野で活躍している。